

3 発掘調査の成果

(1) 中金堂院回廊

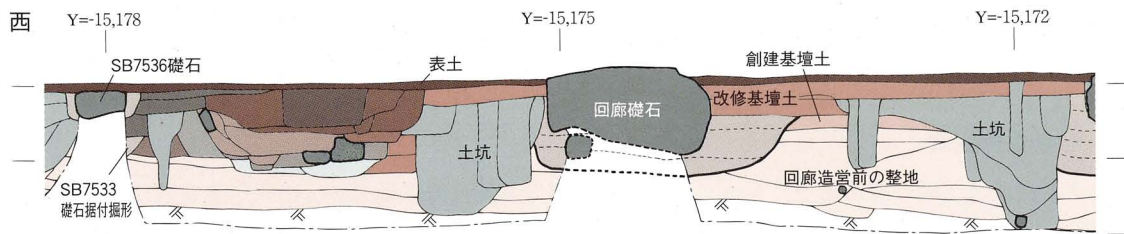
回廊付近には、昨年度の調査において中門東半下部で発見した谷地形が、前庭部東北端に向けてのびている。これは北方へ行くにしたがって徐々に浅くなり、東面回廊北方および北面回廊付近ではバラス混じりの地山が現れる。本調査区における谷地形の最深部は南辺の東面回廊西端付近で、現地表面から約1.6mにおよび、谷を埋めた整地土を覆う灰褐色砂質土上に東面回廊基壇の版築を施している。この基壇版築土には焼土や炭を含まないため、創建当初のものと解釈した。また、この上層には、部分的に後世の基壇改修と考えられる土層も確認できる。一方、北面回廊の基壇は地山削り出しとする。

礎石は基壇上に16石残り、他の17ヶ所では汚れた暗灰色の砂質土を埋土とする抜取穴を検出した。ところが遺存する礎石のうち数ヶ所にも同様の埋土をもつ掘り込みがあり、これは抜き取るのを途中でやめた痕跡と解釈した。礎石および抜取穴の周囲には一辺が約1.4~2.0mの方形を呈する据付穴があり、深皿状の掘り込み最下部に人頭大の根石を入れて礎石を据えている。据付穴の埋土は数層に分層されるが、版築というには粗く、礎石を安定させる地業を施しているらしい。礎石は径0.9~1.2mほどの自然石で、現状では円形の造り出しや出柄の加工を施した痕跡はみられない。石質はほとんどが三笠安山岩で、中金堂にちかい北面回廊西端部の2石は花崗岩である。礎石の据付穴は大部分の箇所ですでに1回しかなく、火災による割裂などによって据え替えた礎石のほかは、創建当初のまま使用してきたと考えてよい。礎石上面の標高は、本調査区における東面回廊南端部で95.6m、北面回廊西端部で95.9mであり、中金堂付近がもっとも高い。

北面回廊SC7510 現地地表下約10cmで遺構検出面である地山に達する。標高の最も高いのは中金堂に近い西端部で、約95.5mである。南北両側の基壇外装は現代の排水溝によって破壊されているが、北側

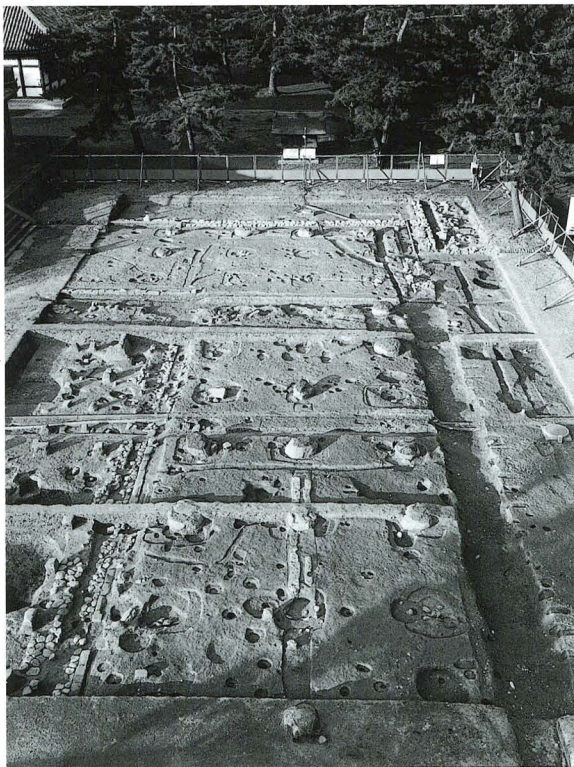


第4図 回廊部分全景（北西から）



第5図 東面回廊基壇断面図 (X=-146,438.3付近の東西あぜを南からみる 縮尺1:50 ページ境一部重複)

には玉石組雨落溝SD7516が残る。北面回廊は先述のように複廊であり、本調査では桁行2間ぶん（隅部を含まず）を検出した。柱間寸法は桁行4.16m（14尺；奈良尺：1尺=295mmほど。以下同）、梁行3.55m（12尺）。なお、北面回廊と東面回廊の交差する隅部分の柱間寸法はすべて12尺である。一部で棟通り地覆石の残がいと考えられる流紋岩質凝灰角レキ岩（二上山～ドンズルポー産。以下、凝灰岩Aと呼称）片群SX7511を検出した。また、基壇南辺部には東西方向にならぶ角板状の流紋岩質溶結凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産。以下、凝灰岩Bと呼称）列SX7518がある。据付埋土に焼土を含むことなどから、中世の遺構と考えられるが、位置的・高さ的にみて基壇外装や敷石とは考えにくく、あるいは階段にともなう施設かもしれない。北雨落溝SD7516は、南北両側石・底石とも人頭大の河原石でつくられ、溝幅は約45cm。東行して東面回廊の東雨落溝につながるが、さらに延長して東僧房の西雨落溝にも連絡するようである。西端部には南側に面をそろえた花崗岩石列（SX7517）が南側石列を破壊して並んでいたが、これは近世以後の遺構である。また、SD7516の据付溝には瓦片や凝灰岩A片を含むので、創建当初はおそらく凝灰岩A製の雨落溝だったと考えられる。なお、回廊礎石から溝心までの距離は約2.12mであり、SD7516にともなう回廊の軒の出は7.2尺（現尺の7尺カ）とみることができる。また、回廊隅部には斜行溝SD7525があり、埋土から12世紀の土師器が出土した。この斜行溝の性格は不明だが、治承焼失後の基壇改修時における排水溝と考えておく。



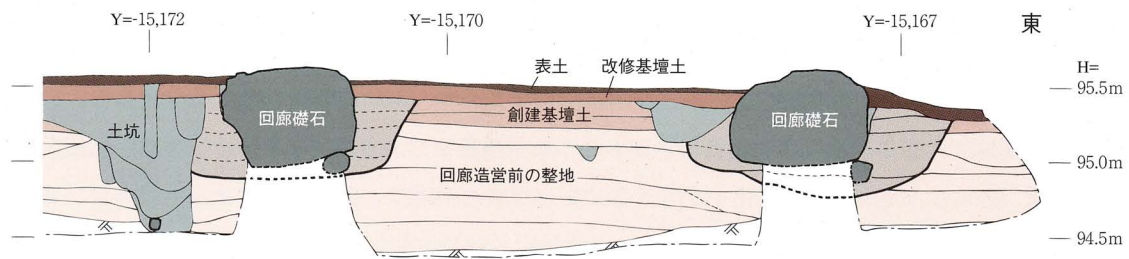
第6図 回廊部分全景（南から）



第7図 北面回廊（東から）



第8図 東面回廊棟通りの地覆石（南西から）



東面回廊SC7500 現地地表下約25cmで遺構検出面である創建版築の上面に達する。東側の基壇外装・雨落溝は現代の排水溝によって大部分が破壊されているものの、西側にはよく残る。東面回廊は桁行7間ぶん（隅部を含まず）を検出した。柱間寸法は桁行3.77m（12.7尺）、梁行3.55m（12尺）である。棟通りには幅23～28cmほどの凝灰岩A製地覆石を2列に並べており（SX7501）、間仕切り最下部を構成する地覆と地長押を受けるものと考えられる。一方、回廊基壇西側では基壇地覆石列SX7502と玉石組雨落溝SD7503、雨落溝外側の玉石敷きSX7504を検出した。SX7502は凝灰岩B製の切石で、幅が18～26cm、長さ40～60cm、厚さ約12cmをはかり、上面は平滑に仕上げている、羽目石をのせる仕口などはみられない。SD7503は、SX7502を東の側石として溝底に河原石を2石ぶん敷き、西の側石にやや大きめの玉石をならべた溝で、底をSX7502の天端よりも約5cmほど低くする。溝底の標高は南が低いので、雨水は北から南に流れたと考えてよい。SX7504はSD7503の西側に約90cm幅で玉石を4～5石ぶんならべた石敷きで、西端の石は面をそろえて見切りとしている。これらは中門にとりつく南面回廊の調査成果とほぼ同じ状況であり、断面の観察でも創建当初まで遡り得ず、古い時期の改修と考えられる。ただし、後述するようにSX7504の下から足場SS7505の一つを検出している。これは玉石敷きをはずして足場をたて、足場を撤去後、再び石敷きを修繕した様相を呈しており、他の部分でも表面的にはわからない改修はあると考えるべきだろう。また、東面回廊東側の一部でも凝灰岩B製の基壇地覆石列SX7506と玉石組雨落溝SD7507を検出した。溝幅は42～45cm。雨落溝外側には回廊内にみられたような玉石敷きはないが、溝とほぼ同時期の造作とみられるバラス敷きSX7508を検出した。以上から東面回廊の基壇の出は約1.84m（6.2尺）、軒の出は2.05m（7尺）に復原できる。

足場SS7505・7515 抜取穴に濃赤色の焼土を多量に含む。基壇上だけでなく雨落溝付近にもあり、玉石敷きSX7504の下からも検出した。ほぼ10尺間隔で並ぶ。東面回廊にともなう足場をSS7505とし、北面回廊にともなう足場をSS7515とした。

土器埋納坑SX7520 東面回廊棟通り外側の4本の柱で囲まれたほぼ中央にある小穴。土師器2枚が重ねられた状態で出土し、土師器の年代観から、嘉暦焼失後の再建時における地鎮遺構と考えられる。



第9図 東面回廊西側の基壇周辺遺構（北東から）



第10図 東面回廊東側の基壇周辺遺構（北から）

(2) 中金堂前庭部

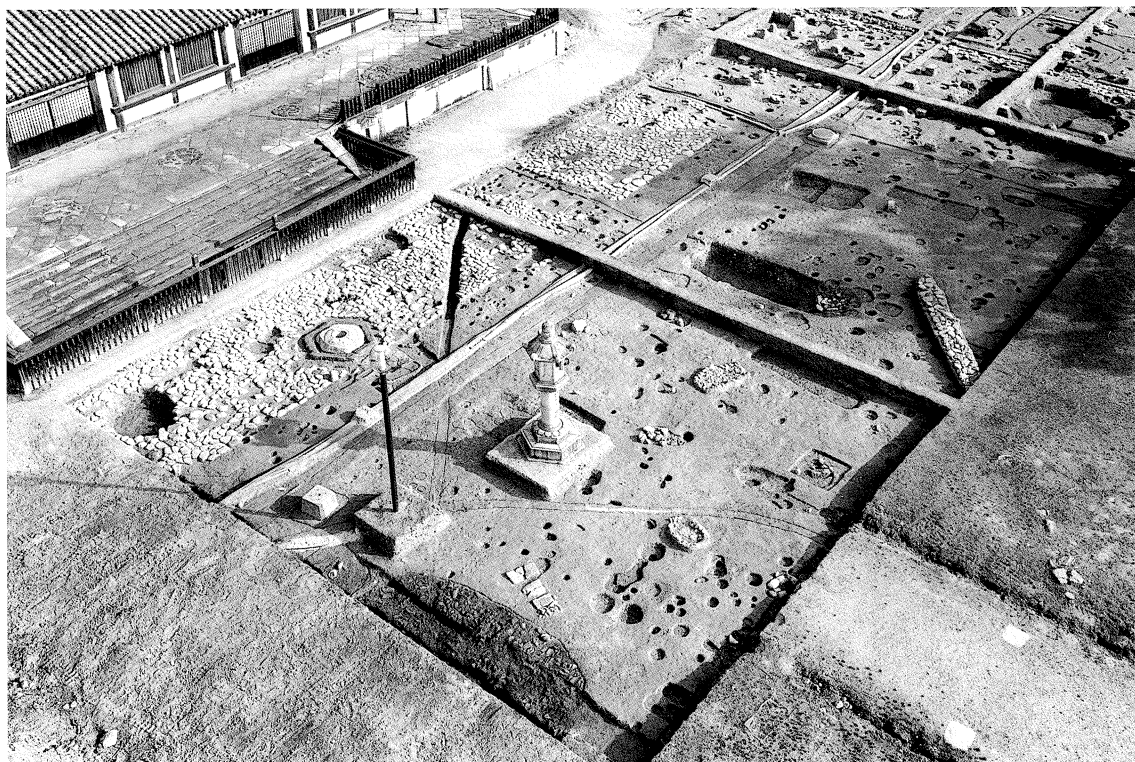
前庭部の旧地形は、中金堂院中軸線付近はほぼ平坦なものの、東面回廊に近づくにつれ徐々に地山が下がり、谷地形となる。遺構は中軸線付近においては地山直上にある凝灰岩Aが粉状にまかれたような整地土面で検出し、そのほかは地山上または谷地形を埋めた整地土上面で検出した。

仮設建物SB7530 前庭部やや内部に建つ桁行9間以上×梁行2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行方向が約1.9m、梁行方向が約2.8m。柱穴から12世紀の土師器皿小片が出土した。

仮設建物SB7531～7533 東面回廊に内接する位置に建つ桁行10間以上×梁行4間の南北棟建物。SB7531は掘立柱建物で、柱位置をほぼ同じくして掘立柱建物SB7532に建て替える。これらの柱穴からは12～13世紀の土師器皿が出土した。また、この2棟と柱位置を同じくする礎石建物SB7533がこの上層に建つ。SB7533の礎石据付掘形からは14世紀以降の瓦質土器が出土している。以上3棟は、いずれも身舎の梁行が2間で東西2面に庇がつく。柱間寸法は桁行方向が約2.8m、梁行方向が約1.9m、庇の出が約2.1mである。これらは南北に長い土坑SK7570より新しい。

仮設建物SB7534～7536 SB7531～7533と重複する位置に建つSB7534は、桁行9間以上×梁行4間（身舎梁行2間+東西2面庇）の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行方向が2.0～2.7m、梁行方向が約2.1m。この建物の柱穴からは14～15世紀の土師器皿が出土した。さらにこれらと重複する位置に建つSB7535は、桁行7間×梁行3間（身舎梁行2間+西庇）の掘立柱南北棟建物で、東庇がつく可能性もある。柱間寸法は桁行・梁行とも約2.1mで、西庇の出が約1.7m。柱穴は小ぶりです。SB7530～7535のうちでは、もっとも新しい建物と考えられる。SB7536は前庭部東端にある桁行6間以上×梁行2間の礎石建南北棟建物。桁行・梁行ともに柱間寸法は約1.95m。調査区の南外でも礎石とその間にある地覆石状にならべた丸瓦列を観察できる。SB7536は明治以降の土坑SK7562よりも新しい。

SB7530～7535は、位置的・規模的にみても『春日社寺曼荼羅』（鎌倉時代。個人蔵；第12図）に描



第11図 中金堂前庭部全景（南西から）

(2) 中金堂前庭部

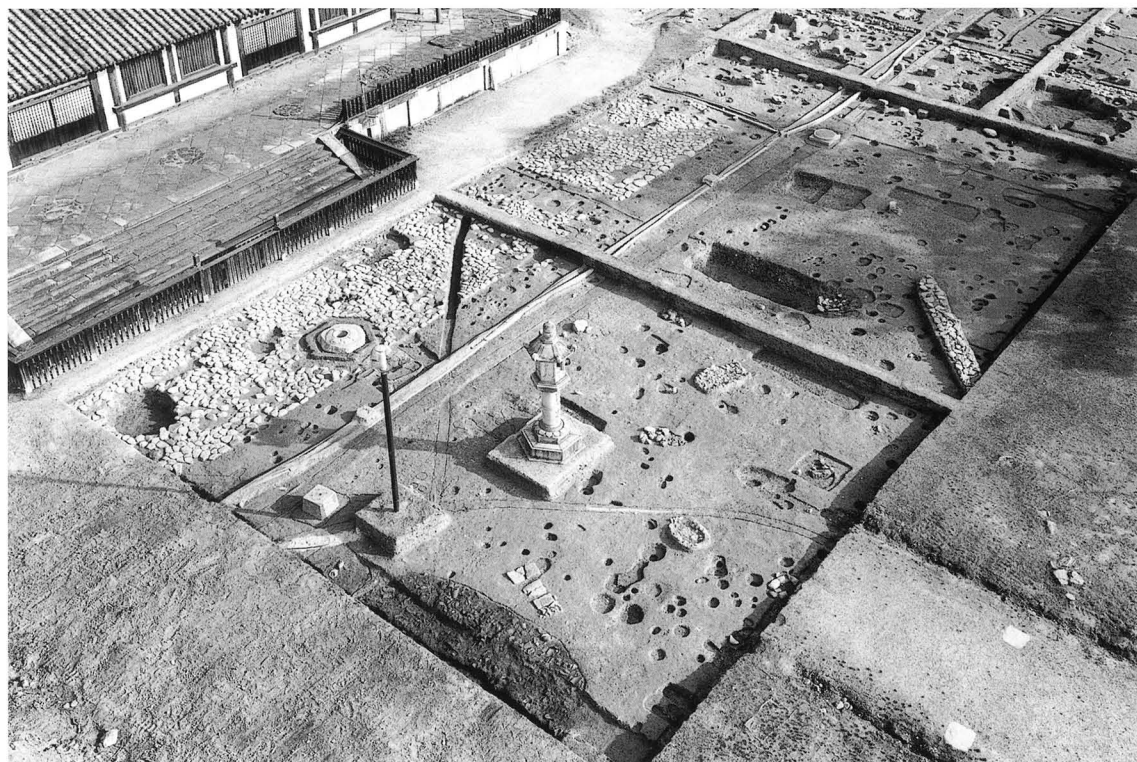
前庭部の旧地形は、中金堂院中軸線付近はほぼ平坦なものの、東面回廊に近づくにつれ徐々に地山が下がり、谷地形となる。遺構は中軸線付近においては地山直上にある凝灰岩Aが粉状にまかれたような整地土面で検出し、そのほかは地山上または谷地形を埋めた整地土上面で検出した。

仮設建物SB7530 前庭部やや内部に建つ桁行9間以上×梁行2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行方向が約1.9m、梁行方向が約2.8m。柱穴から12世紀の土師器皿小片が出土した。

仮設建物SB7531～7533 東面回廊に内接する位置に建つ桁行10間以上×梁行4間の南北棟建物。SB7531は掘立柱建物で、柱位置をほぼ同じくして掘立柱建物SB7532に建て替える。これらの柱穴からは12～13世紀の土師器皿が出土した。また、この2棟と柱位置を同じくする礎石建物SB7533がこの上層に建つ。SB7533の礎石据付掘形からは14世紀以降の瓦質土器が出土している。以上3棟は、いずれも身舎の梁行が2間で東西2面に庇がつく。柱間寸法は桁行方向が約2.8m、梁行方向が約1.9m、庇の出が約2.1mである。これらは南北に長い土坑SK7570より新しい。

仮設建物SB7534～7536 SB7531～7533と重複する位置に建つSB7534は、桁行9間以上×梁行4間（身舎梁行2間+東西2面庇）の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行方向が2.0～2.7m、梁行方向が約2.1m。この建物の柱穴からは14～15世紀の土師器皿が出土した。さらにこれらと重複する位置に建つSB7535は、桁行7間×梁行3間（身舎梁行2間+西庇）の掘立柱南北棟建物で、東庇がつく可能性もある。柱間寸法は桁行・梁行とも約2.1mで、西庇の出が約1.7m。柱穴は小ぶりです。SB7530～7535のうちでは、もっとも新しい建物と考えられる。SB7536は前庭部東端にある桁行6間以上×梁行2間の礎石建南北棟建物。桁行・梁行ともに柱間寸法は約1.95m。調査区の南外でも礎石とその間にある地覆石状にならべた丸瓦列を観察できる。SB7536は明治以降の土坑SK7562よりも新しい。

SB7530～7535は、位置的・規模的にみても『春日社寺曼荼羅』（鎌倉時代。個人蔵；第12図）に描



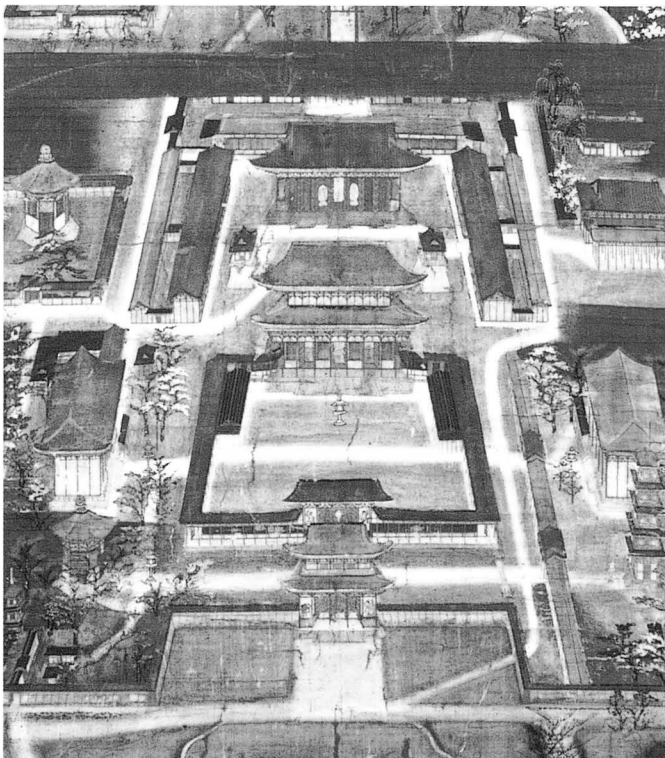
第11図 中金堂前庭部全景（南西から）

かれた中軸線を挟んで対称の位置にある南北棟建物にきわめて類似する。この絵図はどのような場面を描いたのか不明だが、永承元年（1046）火災後の復興記録である『造興福寺記』には、事始の儀式の際、東西回廊から約2丈（約6m）はなれた前庭部に南北棟の幄舎を建てて造営関係の役人が座る場所としている。さらに、治承4年（1180）や享保2年（1717）の火災後にも同様の幄舎を建てて儀式をおこなっている（『興福寺伽藍地曳之図』：享保14年『興福寺伽藍再建事始地曳并法会之記』所収；『興福寺南円堂修理工事報告書』1996より；第13図）ので、本調査で検出したこれらの建物も、このような幄舎の可能性が大きい。なお『養和元年記』（治承焼失後の復興を記す）によれば、このような幄舎は「竹柱茸板上覆幔」とあり、竹柱で建てられ幔で覆われていた。

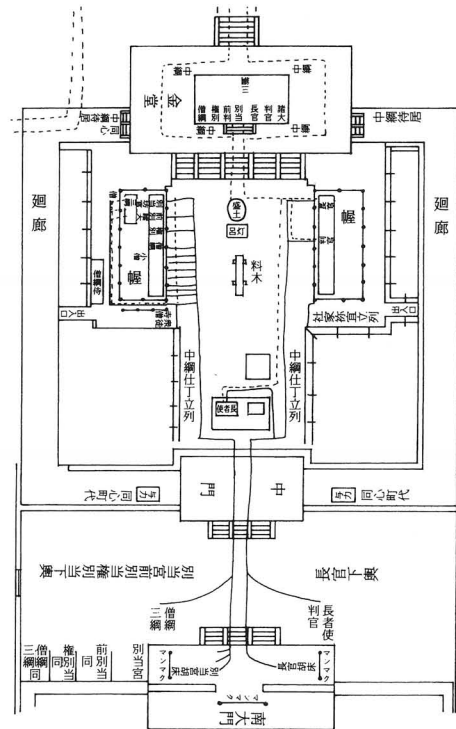
回廊内側では、上記の建物以外にも幄舎となるような掘立柱穴や礎石があり、火災後の復興の際には、ほぼ毎回同様な建物を建てて儀式をおこなっていたと推察される。なお、『春日社寺曼荼羅』に描かれた回廊内の建物は、絵の成立年代と土器の年代観からみて、SB7533もしくはSB7534とみられる。

石敷きSX7550 調査区北西部（中金堂南）にある玉石敷きの舗装。南端に見切りとなる石をならべており、これ以上南には続かない。西方は調査区外にのび、東方は現代の埋設管で破壊されていて、それ以东では検出できない。したがって東西の範囲は不明なもの、現時点ではちょうど中金堂基壇の前面だけに存在すると考えておく。断面観察の結果、この石敷きは地山直上のきれいな整地土上につくられた部分と、炭片や焼土を含む汚れた土の上につくられた部分とが各所に存在し、創建当初につくられたものが部分的に改修をくり返しながら存続してきたものと考えられる。参道部分を石敷きとする例は飛鳥地方の寺院跡で検出されているが、金堂前面のみを石敷きとするのは珍しく、回廊が中門と中金堂にとりついて閉じる点を考慮のうえ、今後この石敷きの意味や用途などを検討しなければならないだろう。

掘立柱東西塀SA7540 石敷きSX7550の約1m南に位置する柱間約1.5m（5尺）の掘立柱東西塀。SX7550東端以东には続かないため、これとほぼ同時期の遺構と考えられる。用途は不明。



第12図 『春日社寺曼荼羅』の興福寺部分



第13図 『興福寺伽藍地曳之図』

燈籠台石SX7545 中門と中金堂を結ぶ中軸線上、石敷きSX7550のなかにある花崗岩製の燈籠台石（第14図）。径は約1.4m。磨滅しているものの、八弁の蓮弁状線形をもつ直径約95cmの突出部がある。その中央には直径36cm、深さ50cmほどの円形の穴を穿っていて、燈籠の竿石をこの穴にさしていたようだ。台石の周囲には、幅25cm、長さ1.0m、厚さ12cmほどの地覆石状に加工した流紋岩質凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産。以下、凝灰岩Cと呼称）を六角形にならべている（SX7546）。この凝灰岩Cの据付穴埋土は焼土を含む汚れた土で、台石よりも明らかに新しい。一方の燈籠台石据付穴は石敷きの下方にのび、拳大～人頭大の河原石のほか、凝灰岩B塊をも根石として使っている。この据付穴に切られて一部きれいな淡黄灰粘質土層があるので、これを当初の据付穴とみて、現在の台石は平安時代頃に据え替えたものと解釈した。また、台石には蓮弁の外側に現状とはまったく関係のない直線的な段差が4箇所残存し、それをつなぐと八角形に復原できるので、もともとは石を八角形に組んで縁部を固め、さらに竿石も八角形をなしていたのかもしれない。しかし、蓮弁状の装飾部分と、竿石をさして安定させる構造部分とが一体化して一石でつくるという手法は、飛鳥寺・山田寺の調査で検出した事例とは異なり、燈籠製作技術の変遷も含めて再検討しなければならないだろう。なお、この石自体や装飾部分の大きさなどから、建物の礎石に穴を穿ち、燈籠台石として再用した可能性があることも指摘しておきたい。

この燈籠の南には、中世頃の土坑があって、逆L字型をした凝灰岩B塊が廃棄されていた。これは一辺が60cm、厚さ15cmほどの板石で、本来は中央に約20cm角の穴をあけた石組みの構成部材と想定される。また、南北に長い焼土混じりの土坑が中軸線を挟んで2箇所掘られている（1対でSK7542）が、燈籠の据付法に関係するものだろうか。一方、調査区南端の中軸線上にも拳大ほどの石を組んだ小燈籠の基礎と考えられる遺構がある（SX7555）。これは近世の遺構であろう。

瓦溜SK7560 調査区西端部にある焼土・炭片を多量に含む瓦溜土坑（第15図）で、創建期の軒瓦のほか緑釉水波文塼（口絵）が出土した。遺物の年代観から永承焼失後の塵芥処理用土坑であろう。

このほかにも前庭部では、大土坑（SK7564・7566～7569）や斜行石組み（SX7565）などを検出したが、早くても享保焼失以後であり、大土坑の多くは明治以後の遺構である。



第14図 燈籠台石とその周辺遺構（西から）



第15図 調査区西端にある瓦溜SK7560（北から）

(3) 東僧房付近

東僧房SB7590 調査区東北隅の壁際で東僧房の礎石を2石検出した。北の礎石は当初位置を保つが、南の礎石は北面回廊北側柱筋とそろえるものの、明治ごろにはほぼ当初位置で据えなおされた痕跡がある。基壇はシルト質の地山削り出しで、現状では基壇の版築土を確認できない。基壇南側には幅32cm、厚さ15cmの凝灰岩A製地覆石列SX7591があり、基壇内側部分には羽目石ののる仕口を設ける。断面観察の結果、この地覆石は創建当初のものとみられる。また、礎石から約1.7m西に凝灰岩A製の塊や小片がつまった南北方向の抜取溝状遺構SD7595があり、これが基壇西辺部の位置にあたる可能性がある。

明治期築地SA7620・7621 明治21年(1891)ごろ、奈良公園における興福寺の寺地が定められた際に設けられた築地塀。大石で積んだ基底部と瓦のつまった積み土を検出した。調査区東端から西へ約5.2mのびたあと、南に折れて約4.0mで切れる。それ以南はつくられた直後の明治28年に取り壊され、本調査で検出した部分も昭和36年(1961)に取り壊され、基底部だけが残ったものである(第17図)。

石組溝SD7623 東僧房の礎石から西へ2.6mの位置にある巨大な石を側石とする南北溝。現地表面直下から掘り込んでおり、享保焼失後につくられた排水溝で、東僧房とは共存しない遺構と考えられる。

瓦溜SK7611 北面回廊SC7510の北方にある瓦廃棄土坑。奈良～平安初期頃の瓦のみ出土する。僧房は元慶2年(878)に焼失しており(『日本三代実録』)、それにとまなう瓦廃棄土坑の可能性が高い。

大土坑SK7606 東僧房の南にある円形の大土坑。平安中期～末期頃の瓦が出土し、治承焼失後の廃棄土坑と考えられる。

このほか、調査区南東隅付近にある近世の炭土坑SK7599からも多量の瓦が出土し、さらにその下層には土師器の細片と焼土を多量に含む土坑SK7598がある。

(4) 回廊造営以前の遺構

東西溝SD7600 北面回廊北側柱筋のやや南にあって地山を掘り込む素掘りの東西溝。幅は約60～80cm、深さは部分的に異なるようで、深いところでは遺構検出面から30cmほど残る。溝埋土には流水にとまなうような層はなく、しかも場所ごとに埋土も違って人工的に埋められたような様相を呈している。断面観察の結果、回廊創建当初の礎石据付穴より古いことが判明した。西方では中金堂もしくは回廊の基壇造成にとまなうと考えられる地山削平によって溝も削られていて残らない。

東西溝SD7610 北面回廊南側柱筋のやや北にあって地山を掘り込む素掘りの東西溝。幅は約25～40cmでごく浅く、東と西では地山とともに削平されてしまっている。これも回廊創建当初の礎石据付穴より古い。これら2条の東西溝は、溝幅の違いこそあれ平行しており、心心距離は約5.94m(奈良尺20尺)をはかる。この2条の溝の解釈については21ページ以下を参照されたい。



第16図 東僧房付近の遺構(南西から)



第17図 明治期築地SA7620・7621(東から)